

津田秀夫文庫古文書

「津田秀夫文庫古文書」は、元関西大学教授の津田秀夫先生が長年にわたって収集した、古文書のコレクションである。津田先生は、1978年3月の東京教育大学の廃学にともない、同年4月に関西大学に移り、文学部史学・地理学科で教鞭をとられた。そして、1989年3月をもって定年退職され、1992年11月15日にご逝去された。津田先生の死後、先生の文庫はご遺族のご厚意のもと、一旦、大阪市史編纂所に寄贈された。そこで蔵書と古文書に分けられたのち、古文書が1996年1月に関西大学文学部古文書室に寄贈され、「津田秀夫文庫古文書」と名付けられた。古文書の内容は、摂津・河内・和泉などの畿内・近国地域はもちろん、関東や長崎など、多岐にわたっている。

今回は、「津田秀夫文庫古文書」のうち、整理と目録作成が終了した古文書を中心に展示をする。

1. 歴史学者・津田秀夫の生涯

津田秀夫（1918～1992）は、日本近世史研究の第一人者であり、戦後いち早く社会経済史研究に取り組み、地域の史料に基づいて実証的な研究を行った歴史学者である。その生涯は、研究と教育に一生を捧げた毎日であった。

津田は、1918年6月、大阪府西成郡今宮町にて誕生した。1942年に東京文理科大学を卒業後、農林学校の教諭となるが、戦争のため休職。復員の後、大阪第一師範学校、1952年に東京教育大学に勤める。1978年3月、東京教育大学廃学に伴い辞職。同年4月に関西大学に移る。1989年3月をもって、関西大学を定年退職。1992年9月まで関西大学大学院の講師を務め、同年11月、膵臓癌のため逝去。74歳であった。

津田秀夫の史料調査

戦後、津田は各地を歩いて精力的に史料調査を行った。佐々木潤之介の「弔辞」に、次の一節がある。

津田さんは大阪時代から一貫して大阪とその周辺を精力的に歩いて史料を博搜し、それによってほかの者が近づけないような厳格な研究を積み重ねていました。和泉・河内の地域で津田さんの足跡のないところはないといわれました。私も何度か大阪周辺を廻ったことがあります。その度ごとに津田さんのお名前を耳にしました。それは、史料調査の対象である地域の人びとに好意をもたれ、信頼されていることの証しでありました。

（『津田秀夫先生を偲ぶ』より）

津田秀夫の授業

津田の授業は、自身の研究の現段階を率直に披瀝するという、非常に難解な授業であった。次の逸話がある。

ある研究論文が発表されると、それを授業で事細かに説明し、次に「こういう内容の論文が出るだろう」という先触れまで述べていたという。授業の難解さ故についていけない学生が続出。それでも津田はお構いなし。ときに受講者の半分以上が不可になることもあったという。

津田の教育は、まず自分が最先端の研究者であり続けるための努力を行い、その知でもって学生に全力で立ち向かうことであった。津田にとって、授業も、学会報告も、真剣勝負の場であったのである。

津田秀夫の教育と学問研究

津田は、教育についても研究と同様、情熱を注いだ。次の一節に津田の教育に対する思いが込められている。

今日における国民の教育というのは、国家が国民教育に取り組むまえに、その原型は民衆教育運動のなかに存在し、むしろ、民衆教育に社会的な公的な配慮をめぐらしたのは、権力よりは民衆自体の教育運動であったことを明らかにしたいのである。教育研究の自由が保証されなければ、批判精神ははぐくまれず、また、教育研究に創意と工夫とはうまれるものではない。批判精神は学問研究の創造に不可欠である。

(『近世民衆教育運動の展開』『はしがき』より)

津田秀夫の学会活動

津田は、大阪歴史学会・日本史研究会・地方史研究協議会・歴史学研究会・歴史科学協議会・歴史教育者協議会などの学会の熱心な会員として、さまざまな活動を行った。

なかでも大阪歴史学会は、津田が岡本良一や井上薫、有坂隆道らとともに創設した学会であり、今日に至るまで、半世紀以上にわたって会の活動は続いている。戦後、1948年1月に発足した大阪歴史談話会が母体となって、翌年10月に大阪歴史学会は結成。1951年6月の総会で、機関誌『ヒストリア』の刊行が決議されるが、その名称は津田の発案であったという。

津田秀夫の歴史学

津田は、「歴史学は社会科学でなければならぬ」と絶えず強調し、かつ苦闘した。次の一節は、それを端的に示している。

科学としての歴史学がとりあげる法則性というのは、人間の主観を超えて、恣意的な解釈による歴史学を排して、過去での人間の存在の客観的な在り方から、未来への展望を歴史を通じて組み立て、現実を転換させる方向を見通そうとするものである。その点で歴史学は人間存在に深くかかわっている学問である。

(『史料保存と歴史学』より)

「津田秀夫文庫古文書」の活用

津田が残した古文書は、近年、整理・目録化が進められている。2003年に『関西大学博物館紀要』から出された「津田秀夫文庫古文書目録(1)」を皮切りに、現在「古文書目録(7)」までの整理・目録化が済んでいる。「津田秀夫文庫古文書」のうちのいくつかは、すでに学術史料集(大阪の部落史委員会編『大阪の部落史 第一巻』、部落解放・人権研究所、2005年)や学外での展示(貝塚市郷土資料展示室主催、特別展「米穀肥料商廣海家と泉南地域」会期：平成19年9月1日～10月21日)において活用されている。今後、さらに整理・目録化が進めば、より一層学術研究に貢献することになるであろう。

現在(2008年10月)までに、整理・目録化が済んだ津田秀夫文庫古文書

- 藪田貫 「津田秀夫文庫古文書(1) 平野郷含翠堂・土橋家文書」(『関西大学博物館紀要』第9号、2003年)
 石本倫子・藪田貫 「津田秀夫文庫古文書(2) 撰津国住吉郡桑津村文書・絵図」(『関西大学博物館紀要』第10号、2004年)
 松本望・藪田貫 「津田秀夫文庫古文書(3) 津田秀夫文庫蔵書」(『関西大学博物館紀要』第11号、2005年)
 藤尾隆志・藪田貫 「津田秀夫文庫古文書(4) 松代藩真田家大坂御用場関係文書」(『関西大学博物館紀要』第12号、2006年)
 吉川潤 「津田秀夫文庫古文書(5) 長崎関係文書」(『関西大学東西学術研究所紀要』第40号、2007年)
 荒武賢一朗 「津田秀夫文庫古文書(6) 播磨国赤穂郡若狭野・浅野隼人家関係文書」(『関西大学博物館紀要』第13号、2007年)
 中井陽一 「津田秀夫文庫古文書(7) 河内国丹北郡松原村・別所村文書」(『関西大学博物館紀要』第14号、2008年)

2. 津田秀夫と平野含翠堂研究

津田秀夫の平野含翠堂^{がんすいどう}研究は、津田の大阪在勤時代の1940年代後半にさかのぼる。著書『近世民衆教育運動の展開—含翠堂にみる郷学思想の本質—』（御茶の水書房、1978年）には、大阪学芸大学（のちの大阪教育大学）の酒井忠雄と平野郷町の研究を始め、のちに藤直幹・有坂隆道・高尾一彦らと研究会を行ったことが記されている。

津田は、長年にわたって手弁当で史料調査を続けたことで知られるが、平野の調査・研究は、戦後ほどなくして津田らが手掛けたのである。

平野郷含翠堂・土橋家文書（古文書目録(1)）

津田の含翠堂研究のもととなった古文書、95点。三輪執斎の講義記録や享保飢饉時の賑窮（給）事業、土橋七郎兵衛を差出・宛名とする書簡など、いずれも含翠堂に直接関わる重要文書群。



1

1 含翠堂三輪先生（執斎）講説記録

享保9年(1724)4月に土橋友直の新宅で行われた三輪執斎(1669～1744)の講説記録。三輪執斎は、名を希賢、通称を善蔵、号を執斎、別号を躬耕廬といった。最初、朱子学者佐藤直方の門人となるが、のちに陽明学に傾倒。その後、京都に移り、京坂に学を講じた。含翠堂の創設者土橋友直とは親交があり、後に土橋は三輪を師事した。三輪は含翠堂において講義を行うなど、含翠堂にとって多大な影響を与えた人物である。

平野含翠堂

享保2年(1717)に摂津平野郷町に設立された郷学。明治5年(1872)に学制が公布されるまでの150年間、平野郷町の公的教育機関として存続した。含翠堂は土橋友直の発議により、土橋宗信ら他4名が同志として平野郷市町に設立。初期の賛助者には、懐徳堂の創設者の一人富永芳春をはじめ、末吉や辻葩など、郷内の有力者がいた。学風は朱子学・陽明学・古学など、必ずしも一派に固定しなかった。講師には、三輪執斎や伊藤東涯、幕末期には藤沢東咳らが来講。享保9年設立の懐徳堂をはじめ、各地の郷学に影響を与えた。



含翠堂跡の碑

昭和60年(1985)、含翠堂顕彰会によって建てられた



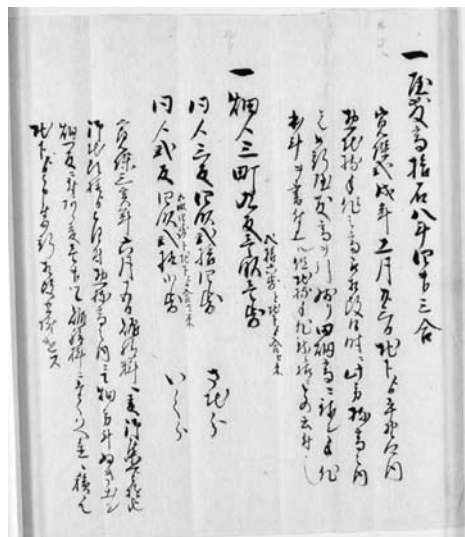
2 (冒頭部分)



2 (末尾部分)

2 含翠堂修復銀の拝借願

文政8年(1825)2月18日付、含翠堂同志中惣代の土橋七郎兵衛から「地方御役所」宛の願書。この場合、「地方御役所」は大坂町奉行所を指す。内容は、含翠堂修復のために過料銀のなかから3貫目の貸与を町奉行所に願い出たもの。また大坂城代が巡見の折に立ち入っていたことなどもわかる。なお、含翠堂の建物は、文政13年(1830)に大規模な普請が行われている。

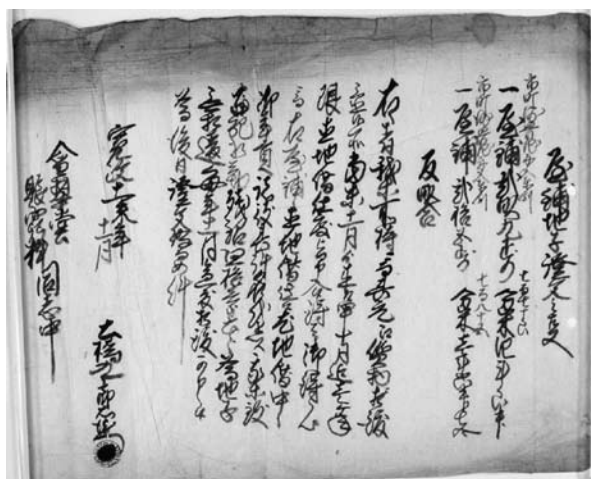


3

3・4 含翠堂の賑窮(給)事業

含翠堂の特徴の一つとして、創立期から賑窮事業が教育活動の一環として含まれていた点あげられる。史料3は、含翠堂が享保17年(1732)の享保飢饉を機に始めた、賑窮料積み立て事業のその後の状況を示している。

史料4は、土橋九郎右衛門から含翠堂賑給料同志中宛の質地・質物証文。含翠堂における賑窮事業は、幕末にいたるまで数次にわたって、郷町と協力しながら行われた。



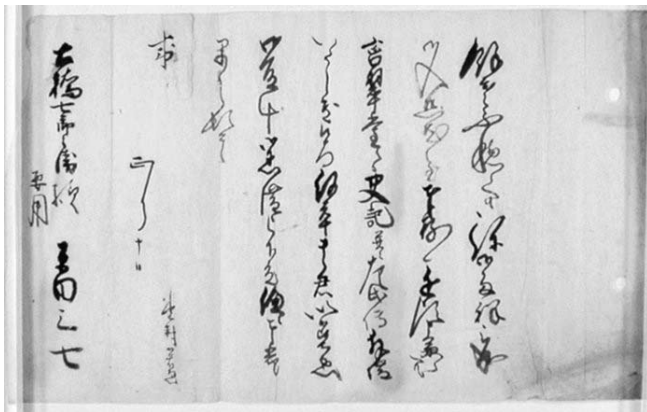
4

5・6 平野含翠堂関係書簡

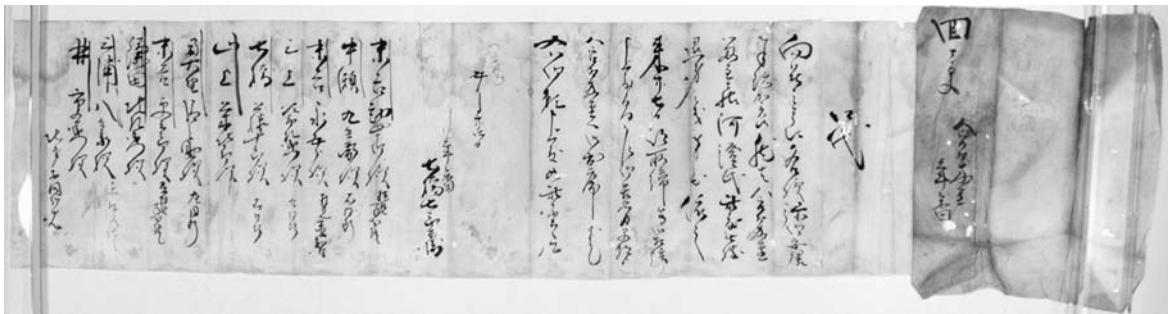
史料5は、原田三七から土橋七郎兵衛あての書簡。内容は、含翠堂所蔵の『史記』と『左氏伝』の借用を依頼したもの。

史料6は、土橋七郎兵衛から末吉勘四郎ほか10名あての書簡。内容は、含翠堂留主居（含翠堂に住込み、事務管理業務を携わる）河澄氏の退身後の取締について、末吉勘四郎らの出席を呼びかけたもの。

なお、両史料は『近世民衆教育運動の展開』（177頁・199頁）で使用されている。



5



6



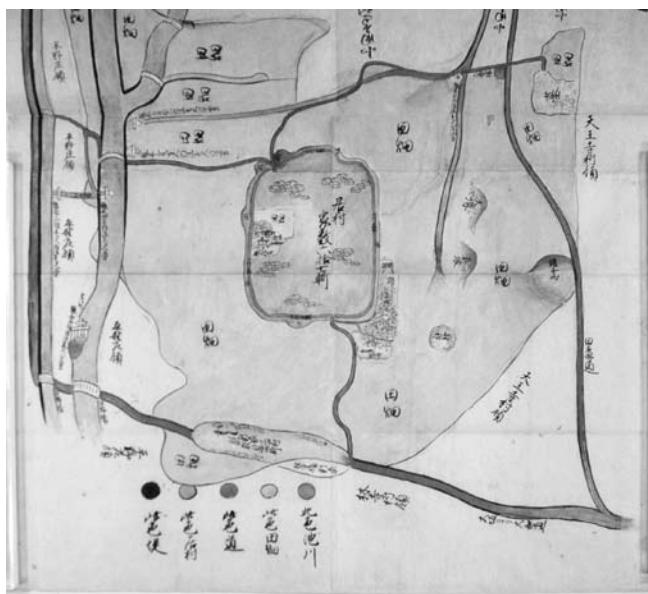
津田秀夫文庫古文書の展示風景

3. 「津田秀夫文庫古文書」の紹介

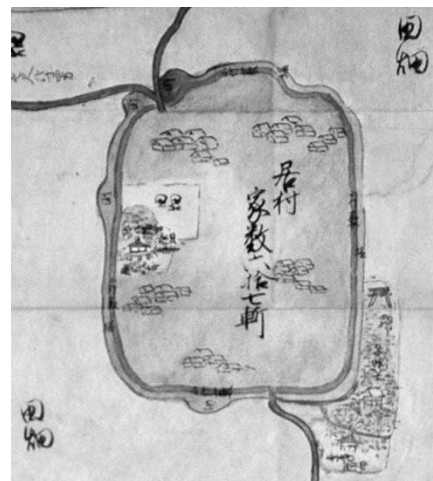
津田は大阪地域以外にも、各地の古文書を収集した。日本列島規模の江戸時代を明らかにしたいという津田の熱い思いが、これら収集文書に込められている。ここでは、整理・目録化が済んだ史料のなかから、いくつかを選んで紹介をする。

摂津国住吉郡桑津村文書・絵図（古文書目録（2））

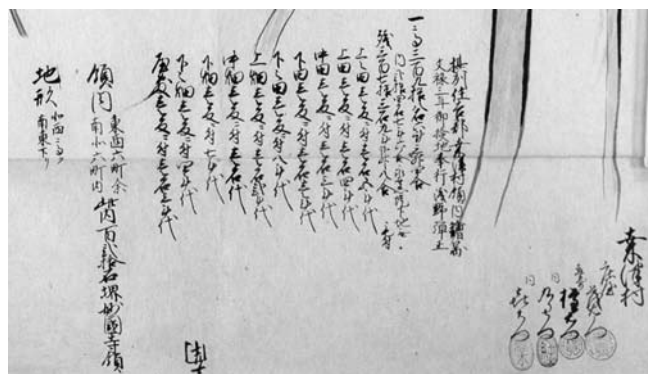
桑津村は、住吉郡の北端、東成郡と隣接する位置にある。目録は、文書目録と絵図目録ならなり、文書目録の内容は、法令、土地、戸口、貢租、村政、農業、用悪水、商業・金融、交通、寺社・家に関わる文書、82点。絵図目録は、桑津村を中心にした村絵図、58点。保存状態はよく、彩色もよく残っている。



7 (部分)



7 (部分)



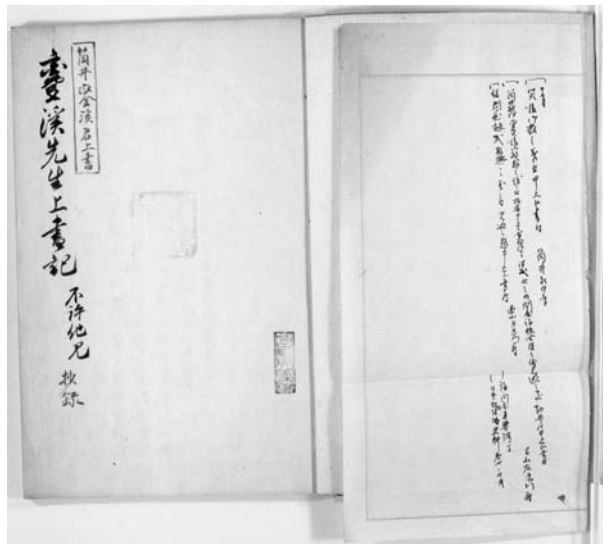
7 (部分)

7 摂州住吉郡桑津村領内絵図

「摂州住吉郡桑津村領内絵図」は、文禄3年(1594)に実施された文禄検地(古検)段階の村高や村内の様子を示している。村の中心は、環濠集落である「居村」で、家数は67軒とある。絵図の作成年代は不明である。ただ、河川の流路から、文禄検地以後から大和川付替以前の情報が描かれていると考えられる。

津田秀夫文庫蔵書（古文書目録（3））

津田が収集した蔵書、248点。そのうち写本が69点、刊本が179点。これらの和本には、「津田秀夫蔵書」の蔵書印が捺されている。また、津田による書き込みも見られる。経済・商業・農業の分類に属する書物が多い点は、社会経済史家・津田秀夫文庫蔵書の特徴といえる。



8 『鑾溪先生上書記』

鑾溪先生こと筒井政憲が、老中阿部正弘や牧野忠雅に提出した、政治や海防問題に関する上申書を三通収めた資料。筒井政憲（1778～1859）は、江戸時代後期の幕臣で、長崎奉行、江戸町奉行、大目付格などを歴任している。

津田は、当資料の見返しに罫紙を貼り、3点の書付を摘記している。これらの書付はいずれも、株仲間解散令によって停止されていた株仲間を再興させることを上申したもの。津田は自著『封建経済政策の展開と市場構造』・『封建社会解体過程研究序説』などで株仲間再興令に着目しており、その際利用したものであろう。

8

9 『二葉草』・『地方二葉草』・『牧民類説』

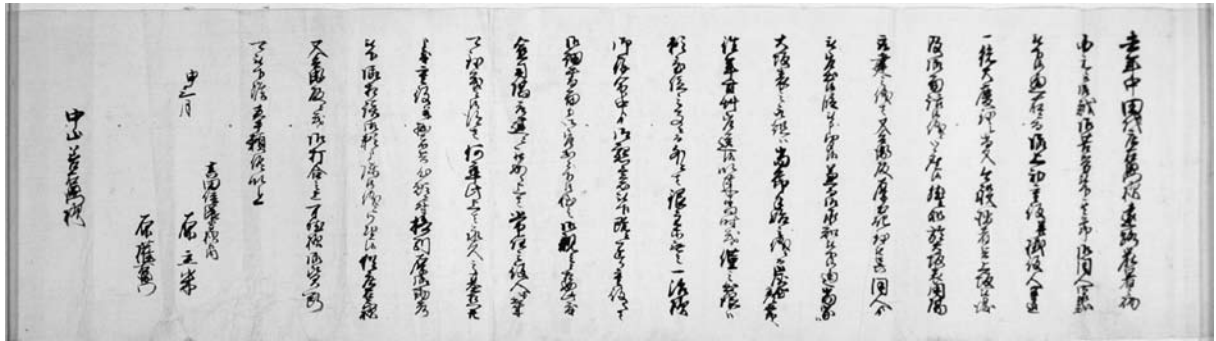
これら3点の書物は、検地や検見など、年貢収納にかかわる事柄について詳細に書かれたもの。『二葉草』と『地方二葉草』には「二葉草」と題された文章が収録されている。内容の相違はほとんど見られない。また『二葉草』に収録された「新田御検地御條目」と『牧民類説』に収録された「新田検地之次第」はともに、享保11年（1726）に発布された「新田検地条目」。「新田検地条目」（『徳川禁令考』所収）と比較すると、『牧民類説』のみに見られる内容も記されている。



9

松代藩真田家大坂御用場関係文書（古文書目録（4））

信濃国松代藩真田家が、大坂に設置した拠点「御用場」にかかる史料、68点。年代がわかる史料は嘉永3年（1850）～文久2年（1862）で、その他の史料も多くは幕末期のものと思われる。真田家と大坂の銀主・加嶋屋や炭屋との書状や、御用場の設立経緯に関する史料がある。



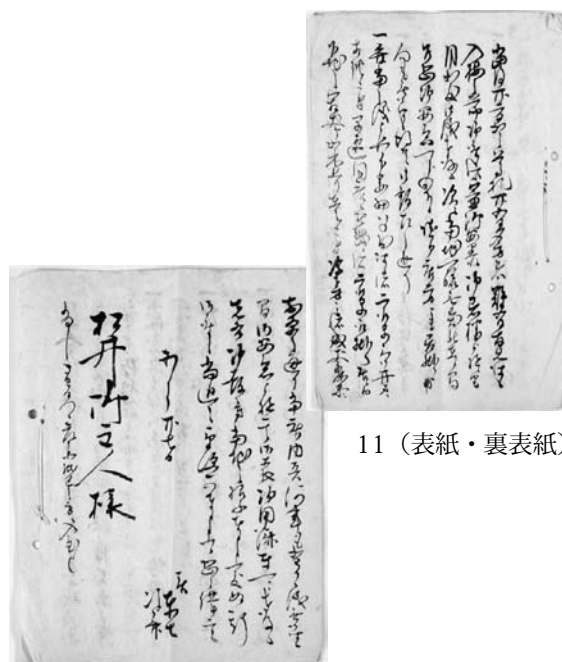
10

10 中山善右衛門宛原主米・権右衛門書状

原主米・権右衛門が中山善右衛門へ宛てた書状。先年に善右衛門の親類・田代庄右衛門が松代まで出かけ、藩主から家臣一同まで謁見したことが記されている。また、加嶋屋又兵衛が御用場設立に尽力したこともわかる。その上で、大坂には甘草の専売取引先である炭屋彦五郎の他に、主だった協力者はなく、松代藩側は善右衛門に対して、親類の田代庄右衛門や加嶋屋又兵衛と相談しながら協力してもらえよう求めている。

播磨国赤穂郡若狭野・浅野隼人家関係文書（古文書目録（6））

播磨国赤穂郡若狭野村（現・兵庫県相生市）に陣屋を構えていた浅野隼人家関係文書、279点。年代は天保5年（1834）から明治14年（1881）にわたり、幕末期が中心。浅野隼人家は、のちに忠臣蔵で有名となる赤穂浅野家から、寛文11年（1671）に分知され、成立した旗本。史料は、大坂御用場・天王寺屋（松井）安右衛門関係、家政・財政関係、幕末政治情報関係の3点の特徴がみられる。



11（表紙・裏表紙）

11 大坂御用場仕法帳

浅野家当主がいる江戸屋敷では家政全般を扱い、年貢・支配に関する実務を若狭野陣屋が担った。大坂御用場（用途）の天王寺屋は年貢米回送などに関与し、家政・財政について大きな役割を果たした。史料11は、天王寺屋の店方・東七と次郎介から、若狭野陣屋に出張中の安右衛門に差し出された報告書。商売向きに関する内容のほか、大坂の火事やはしかの流行など、さまざまな情報が記されている。

長崎関係文書（古文書目録（5））

幕末期の長崎に関わる史料、84点。史料の内容は、長崎会所の貿易記録や会所役人が作成したものなど、幕末期の長崎会所の活動を示す史料群である。



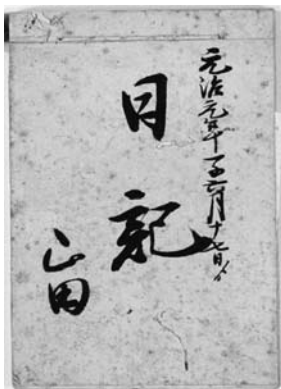
12 本売直組帳

弘化2年（1845）に、長崎で行われた貿易の記録書。貿易を担当していた長崎会所と、この年に来航した唐船6艘、オランダ船1艘との間の、輸入品の取引を記録する。史料では、輸入品の名前の上に「賣」や「带回」などの文字がみえるが、これは長崎会所が唐船・オランダ船との間で行った、輸入品の値段交渉の結果を示している。「賣」と記されているものは、取引が成立して輸入されることになった輸入品であり、「带回」（オランダ船の場合は「不」と記されている）とあるのは、取引が成立しなかった輸入品である。

12

13 日記

元治元年（1864）に、長崎から大坂へ出張した長崎会所の役人山田政十郎が記した日記。当時、山田は長崎会所小役格であり、輸出品の俵物に関わる銀を運送するため、長崎から大坂に向かっていた。



13



14

14 日記 巻

長崎から大坂へ出向いた香月の慶応2年（1866）の日記。この香月という人物は、長崎会所の役人であると考えられる。

奉存候間、同志之者共私惣代を以、

此段乍恐御内意御歎奉申上

呉候様申聞候、以上

文政八年 含翠堂同志中惣代

酉二月十八日 野堂町

土橋七郎兵衛[㊟]

地方

御役所

口代

向暑之節各様弥御安康

奉珍賀候、然者含翠堂

留主居河澄氏、此度無據

退身之義被申出、依之

来廿七日跡取締等御相談

申上度候間、乍御苦勞、早朝^ㇿ

含翠堂へ御出席可被下候

右御願申上度、如此御座候、以上

五月廿四日

年番

土橋七郎兵衛

末吉勘四郎様 拜見承知仕候

中瀬九兵衛様 右同断

末吉永五郎様 拜見承知仕候

三上次郎左衛門様 右同断

土橋藤十郎様 右同断

山上栄次郎様 右同断

奥野清之助様 右同断

末吉平三郎様 忝拜見承知仕候

鎌田次左衛門様 忝拜見仕候

三浦八兵衛様 忝拜見仕候

林市右衛門様

次第不同御免

史料5 平野含翠堂関係書簡

餘寒不穩候へ共、弥多祥被成

御入懇然至奉存候、近頃申兼候へ共

含翠堂二而史記并二左氏傳拝借

いたし度候間、何卒貴君以善悪

御取斗御恩借被下度、偏二奉希候

早々頓首

〔封〕 (卷) 封御宥恕

正月十日

土橋七郎兵衛様 原田三七

要用

史料6 平野含翠堂関係書簡

(包紙上巻) 一回章 含翠堂

年番

右者我等所持二而、其元江質物二相渡置候所、当未十一月〆来ル申十月迄迄ケ年限、直地借仕度旨申入候得者御得心二而、右屋鋪直地借仕候、尤地借中之御年貢諸役其許名代を以、我等致支配相勤、残銀四拾壹匁六分爲地子無相違、毎年十一月急度相渡可申候、爲後日證文依而如件

寛政十一未年 土橋九郎右衛門[㊦]

十一月

含翠堂

賑窮料同志中

史料4 含翠堂の賑窮（給）事業

乍恐御内意奉願上候

一市町含翠堂之義ハ、御仁恵を以

年々爲地子御米被下置、冥加至極

難在相續仕来候處、享和三年亥

閏正月乍恐

寛敬院様當郷御巡見之砌、

難在被爲 入候御列二而、其後

酒井讚岐守様并 松平和泉守様

大坂表御巡見之節も同様被爲

入候程も難斗旨、大坂御奉行所〆

前以被仰渡候二付、其度々破損取繕

候へとも、何分古建物二而最早修覆難及相成候二付、此度建修覆仕度同志之者共一統念願二御座候得とも

時節柄難及自力罷在候、勿論

賑窮料手當銀等御座候得とも

普請入用二取賄候而ハ荒年臨時

之程、是又一統心配仕居候、依之年賦

返上之御銀拝借御願も奉申上

度、同志之者共一統内存二御座候

得とも、乍恐

御上様二も 御泊城被爲蒙

仰莫太之御物入被爲 在候御時

節奉恐察差扣へ罷在候処、此比

修覆不仕候而ハ棟樑変事之程

相懼、且此後御巡見之砌必至与

差支候故、無據御歎奉願上候ハ、過料

御取上ケ二相成候、御銀之内三貫目

御憐愍を以、来ル午年迄十ヶ年之

間、同志之内林市左衛門・中瀬九兵衛

兩人江御預ケ被成下度奉願上候、左候ハ、

右御銀を以早速修覆仕度奉存候、

尤御預ケ二相成、臨時御入用二被爲

在候ハ、不抱年限右市左衛門・九兵衛

兩人より何時二而も相弁上納可仕候

間、御慈憐を以、願之通御聞濟

被爲 成下候ハ、廣太之御恩難在

4. 史料翻刻

史料1 含翠堂三輪先生(執齋)講説記録

享保九年三輪先生平野

辰四月廿三日夜於友直新宅

所謂誠其意——傳文ハ経文ノ教ヲ身ニ□ク取りテ行フヘキ

○手ヲ下□処ヲ説ル也

廿四日 於含翠堂

大学之道在明——大学ハ学問ノ尊称也

学ハ覚ノ字ノ意○道トハ道スズ也○親トハ彼我無

間ヲ云ナリ○止トハスハリテイコカヌヲ云、安身スルヲ云ナリ

○能トハナナル、事ナリ○得トハ手ニ入ル事ナリ○物モノモコトモ一ツ也

○事トハ知止ハワザノ始能得ハワザノ終ナリ○近トハ困

勤ノ工夫ナリ○道トハ大学ノ道ノ道ノ字ナリ

廿五日同断

○古之欲明——コト古ヘヲ師トセサルハ道ニ非スト云ヘリ

故ニ古之ト云ヘリ

シルシヲ語レハ天下平ナリト云イヘリ、工夫ヲ論スル

寸ハ明々徳ト云ヘリ○欲ノ字重シヲモヒ子カフ事也

○心ハカナメノ如シ、意ハホ子ノ如シ○致知格物ハ誠意ノ作

用ナリ意ノ在処物意ノテル処ハ知

廿五日夜三村氏宅

○詩云瞻彼——コ、ハ格物ノシヤウナリ

心廣腴胖ナル君子ノ事ヲ云ヘリ○克ハシツハリ

トタヘコタユル事也、コノ語誠意中ノ事也

史料2 含翠堂修復銀の拝借願

一屋敷高拾石八斗四升三合

寛保貳戌年十一月廿三日地下ノ平野郷内

惣地持手作之高被相改候時ニ、此方持高之内

ニて、如斯屋敷高ヲ引、残り田畑高二致シ手作

本斗ヲ書付上ル、但地持手作致候様ニとの云付也

貳拾六歩と地下ノ合セ束

一畑ノ三町九反壹畝壹歩

同ノ三反四畝貳拾四分 さち分

五畝四歩ト地下ノ合セ束

同ノ貳反四畝貳拾貳歩 いく分

寛保三亥年六月十五日賑給料へ麦御集可被遊由、

御地頭様を被仰付、惣持高之内ニて畑方斗ぬき出シ、

畑一反二付あら麦壹升ツ、賑給料ニたくハへ置候積ニて

地下ノ被申付、如斯相改書附遣ス

史料3 含翠堂の賑窮(給)事業

屋鋪地子證文之事

市町河骨池舟入東側 七百七十六

一屋鋪貳畝九歩 分米四斗六升

市町河骨池舟入東側 七百八十五

一屋鋪貳拾五歩 分米壹斗六升七合

反畝合